

## 島津軍進攻と三重郷松尾城

芦 刈 政 治

### 一 はじめに

三重郷松尾城は大分県大野郡三重町の東方、大字松尾字城山一三五五―一三七五番地にある。「豊後国志」に  
松尾堡 在三重郷松尾村、天正丙戌、薩兵據之、

とあるとおり、松尾城は天正十四年（一五八六）、島津軍が豊後国に進攻したときの最初の拠点であった。本稿では島津軍の松尾城進出の理由、当城における島津軍の戦略的動静、島津軍の松尾城退去を述べながら、島津軍の入城の時日、松尾城の構造、当城に関する大友家臣団並びに地下衆らの対応などにも触れたい。

この小論で引用する島津方の史料は「鹿兒島県史料旧記雑録後篇2」に所載する史料であり、大友方の史料「大友家文書録」は、とくに断わりのない限り「大分県史料33」所載の史料を引用する。

### 二 島津軍の三重郷進出

「義久公御譜中」は豊後退治の理由を次のように述べている。

日向州伊東氏背<sub>レ</sub>我<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>敵、(中略)渠之軍衆已敗乘死之際、僅遁出<sub>レ</sub>奔<sub>レ</sub>于豊後州<sub>二</sub>矣、於<sub>レ</sub>茲乎、大友氏欲<sub>レ</sub>救<sub>レ</sub>伊東氏<sub>二</sub>還<sub>レ</sub>之於

故郷也、先是天正六戊寅之冬、率<sub>二</sub>太軍<sub>一</sub>來<sub>二</sub>困我之日州新納院高城<sub>一</sub>、然而失利於一戰、悉以敗北、大半亡<sub>二</sub>其軍<sub>一</sub>矣、今也不止<sub>二</sub>其憤<sub>一</sub>、反聞<sub>二</sub>薩摩退治之免於有<sub>レ</sub>請<sub>二</sub>関白秀吉公<sub>一</sub>矣、吾熟<sub>レ</sub>思之、先渠之計策、以不<sub>レ</sub>誅<sub>レ</sub>伐之<sub>レ</sub>者、豈異<sub>二</sub>坐而待<sub>レ</sub>亡<sub>一</sub>乎哉、(下略)

島津氏に背いて領地を没収され、豊後国に遁れた日向国伊東氏を故郷に還そうとして、大友氏は天正六年(一五七八)、大軍を率いて日向国高城を攻めた。しかし、悉く敗北してその軍の大半を失った。今やその憤り止まず、かえって薩摩退治の許可を豊臣秀吉に請う有様である。大友氏の進攻を座して待ち、滅亡するよりも、誅伐した方がよいのではないかと。

島津軍の豊後国進攻の経緯については、渡辺澄夫博士の詳細な論述があるので参照されたい。<sup>(1)</sup>

島津義久は天正十四年十月、島津義弘に三万七百余騎を授けて肥後口から、島津家久には一万余騎を与えて、日向口から豊後国へ進攻することを命じた。戦記類に家久軍二万騎以上と記すものがあるが「樺山大輔忠助譜中」に一万余騎とあるから、この方が正しいと考える。

家久は同月十五日、上井伊勢守覚兼、吉利下総守忠澄・土持左馬頭・山田越前守有信・伊集院下野守久治・同姓美作守・本田下野守親貞・樺山安芸守忠助已下を率いて、日向国佐土原を進発した。「義久公御譜中」に十月十四日と記載する。これについて、家久の副将である上井覚兼は日記に「拾月十五日、看経等如<sub>レ</sub>常、衆中各同心にて此日打立候也、首途之様子等如<sub>レ</sub>恒例」と述べているから、佐土原進発の時は天正十四年十月十五日と考えられる。

島津軍の豊後国進攻について、諸書には単に十月と記すのみで、その時日が明確でない。次にこのことを考察してみよう。島津軍が日向・豊後兩國の境にある梓嶺を越え、三重郷に討ち入った時日について「旧記雑録」は十月二十六日としている。ところが、天正十五年三月十七日、島津軍の松尾城退去にあたっての「中務大輔家久譜中」の記事には、

(三月十七日)(長とも)

其夜宿<sub>二</sub>于永谷川内<sub>一</sub>、同十八日、発<sub>二</sub>于永谷川内<sub>一</sub>之路頭、凶徒屢雖<sub>二</sub>進來<sub>一</sub>、指揮而追<sub>二</sub>退四方<sub>一</sub>、踰<sub>二</sub>梓山<sub>一</sub>之際、薩・隅・日之軍衆為<sub>二</sub>加勢<sub>一</sub>進來矣、其夜已入<sub>二</sub>県城<sub>一</sub>、

とあって、松尾城から日向国奥城（延岡）まで二日の行程で行動している。したがって、十月二十六日松尾城進攻説には過誤があると思われる。

いま、しばらく島津軍の行動と路程に基づいて、松尾城進攻の日時を検討する。「中務大輔家久譜中」に、家久領三万余騎、踰梓嶺之險路、其山下佐伯之内有古壘、攻之忽以陷焉、而入三重、欲陷松尾城、文中、佐伯のうちの古壘は、大友軍の部将柴田紹安の守備する宇目郷朝日ヶ嶽城である。佐土原から奥城まで約二〇里、奥城から梓嶺まで七里、梓嶺から宇目郷を経て三重までは八里の距離がある。朝日ヶ嶽城柴田紹安の島津軍内応によって、宇目郷では、ほとんど戦鬪らしい戦鬪は行なわれなかった。また、三重入郷にあたっても「薩州勢は鉄砲の一つも打返さずして三重の郷へ押通り、松尾と云ける山を本陣とし」（『豊薩軍記』）という状況であったことから考えて、梓嶺・三重間の島津軍の行動は、比較的迅速に行なわれたと判断される。したがって、佐土原進発から松尾城入城までは四ないし五日間とみてよいであらう。

「一本に云、（中略）中務丞家久を大将として、天正十四年丙戌の十月廿ケ日、豊後の地へ打入」という史料があり、<sup>(2)</sup> 其の出典は明らかではないが、佐土原から三重までの路程、当時の軍事情況から考えて、この史料に記す時日には妥当性があると思われる。結論としていえば、島津軍の松尾城入城は天正十四年十月二十日前後と考えられる。

註

(1) 渡辺澄夫著「増訂豊後大友氏の研究」二九〇頁、三四九頁

(2) 「大友興廢記」「大分県郷土史料集成戦記篇」五六頁および「雉城雜誌」「同書地誌篇」五三七頁

### 三 島津軍の松尾城進出の理由

まず、松尾城の地形および構造面からの理由について述べる。

松尾城は三重川の支流松尾川と高尾川に挟まれ、佩楯山（標高七五四呎）系に続く、標高二七三呎の小規模な山岳である。しかし、四面峻険で登はん困難な山容をもっており「東の方は溪深く奇石峙ち、滑かにして鳥ならでは翔りがたし。西南北は岸高く松樹葉茂して楯の如し」（『豊薩軍記』）と記されている。山頂の現状は多少の起伏はあるが、おおむね平坦である。低木に覆われているものの伐採は容易であり、北西に緒方、北東に府内、東に臼杵・野津方面を眺望することができる。

次に江戸時代の記録中の「大野郡三重松尾古城」<sup>1)</sup>を掲げる。

三重之郷之内、松尾村古城之跡、山上へ之坂之内、壹町半。本口は丑寅之方に有。南の方に裏口有。此山小松山也。上に而場の広さ、長さ東西に三拾間、南北へ拾四間、山上に水無し。谷に水有。東西山かさ有。

山上へは一町半（約一六四呎）の道のりである。本口（旧広福寺側）は北東の方にある。南（旧高屋村）に裏口がある。城山は小松山となっている。山上の面積は約四二〇坪（一、三八六平方呎）である。山上に水はないが、わずかながら谷間に湧水がある。

「樺山紹劔自記」には、松尾城の構造について次のように記されている。

松尾の城へ上り見申候、城ハ岸切廻し候而、番や一ツ作候而、平田狩野介麓に被居候、新納縫殿助も麓に候而、夫丸之様成もの老人ツ、番ニ上セ候

松尾城は天然の地形に加えて岸を切り回し、山上に物見の番屋を急造して四方の偵察を行ない、麓には本陣を設置したと考えて差支えあるまい。島津軍の本陣については、

夫れ三重の郷松尾山と云ひけるは、元來葉師如来の道場にてぞありける。（中略）松尾山広福寺と号す。（中略）家久是を根城と定め、尾崎手崎に櫓を上げ、多くの守りを付置く。

として（『豊薩軍記』）、山麓の広福寺が島津家久の本陣と定められたことが伝えられている。

「義弘公御譜中」に「設陣柵於盤東寺」とあり、また「家久屯陣於盤東寺」（『義久公御譜中』）とあって、天正十四

年十月、豊後国進攻にあたって、盤東寺に島津軍本陣が設けられたことを知り得る。いま、盤東寺の所在は不明であるが、広福寺には一一の房舎が存在したことが伝えられており（後述）、付近には古坊の地名も残存していることから、盤東寺は当時の広福寺名か、または広福寺坊中のひとつではないかと推定される。広福寺（現在、真言宗醍醐派吉祥寺）は、胎内銘に、

右奉造立豊州三重郷広福寺志者、为天長地久別者当地頭者当山仏法

興隆広〇至〇〇〇〇日也 弘安七年歲次甲申七月十一日

とある大威徳明王をはじめ、主尊の薬師如来、鎌倉時代の作風をもつ不動明王・金剛力士像などを祭祀している。島津軍退去のときに一部焼失して（後述）、その全体規模は不明であるが、金剛力士像二体（胴部他亡失）の頭部の縦五七・五寸の巨像が山門に安置される伽藍であった。島津軍が松尾城で軍議を行なったこと、島津家久側近の起居する建造物の存在を推測させる史料（「樺山紹劔自記」）のあることから、この広福寺が島津軍本陣にあてられたことは、ほぼ間違いない。

島津軍が豊後国進攻にあたって、河川に挟まれ、戦略的地域を眺望・偵察できる高度をもち、峻険ではあるが短時間で登山可能な独立的山岳があり、主・副将および重臣の滞在・軍議に供される多数の建造物が集中的に存在することなどの理由によって、松尾城を拠点として選んだのであろう。

次に松尾城を中心とする交通面からの理由について述べる。

③ 古代、豊後国高坂駅（大分市）から大野郡三重駅・小野駅（宇目町）を経て、日向国長井駅（北川町）へ通じる官道があった。近世においても、

国府至三戸次市二里余、至三郡之三重市六里余、経三内山・樺嶺、至三小野市二四里、至三梓嶺二四里余、又半里、至三国界杉

とあって（『豊後国志』）、豊後国府内から日向国に至る路程が記されている。この道路は、中世末期においても、日向国から大友氏の本拠である府内に通じる主要道とみて差支えないと思われる。大友宗麟の居城である丹生嶋城（臼杵市）までは、

三重郷「芦刈・竹脇・野津市三里余、池原・小切島二里、是海部郡界白杵莊搔懐村也、自是距白杵城二里」(「豊後国志」)とされて、松尾城から七里強の距離にある。さらに松尾城の西方約六里に志賀親次(のち親善)の拠る岡城(竹田市)があり、この竹田往還筋には緒方莊小牧・柏野・高尾(ともに緒方町)・豊の抵抗線があった。「南郡(大野・直入郡)には岡と申候城、三重口ニハにうの嶋と云城こたへたり、其上こたへたる城も有」(「樺山紹劔自記」)るといふ観測は、豊後国進攻後の作戦を予想させる。

松尾城付近の交通路の詳細をみると、近代初期ではあるが「日向道三國峠ヨリ東ニ岐レ松尾路アリ」として、隣郷宇目境の三國峠から三重郷鷺谷村(三重町)を経て松尾城下に至る道路が掲げられている。この道路は近世においても、日向国飢肥藩士が交通路として利用した例<sup>(5)</sup>があり、古くから開かれていたことが知られる。三國峠より西に分かれて内山連城寺・三重市を経由、松尾城に至る交通路も島津軍退去の際に通行した道路であった<sup>(6)</sup>。また、松尾村内には因尾(本匠村)路<sup>(4)</sup>があった。難道ではあるが、海部郡を経て日向国に至る交通が行なわれている。この交通路は佐伯莊榑牟礼城主佐伯惟定の守備圏であった。

このように松尾城は、日向国から府内・白杵・佐伯・岡への要ともいふべき地理的位置にある。対大友戦の展開のために松尾城を確保することは、島津軍にとつてきわめて重要な戦略であったに違いない。

これほど戦略的に重要な土地柄であれば、大友氏が松尾城守備を置かないはずはないという疑問が残る。松尾城の守将についての確実な史料は見当たらないが「大友家大身衆・御家門・御血筋・御縁組衆」<sup>(7)</sup>によれば「松尾城主戸次治部少輔鑑方・同城主戸次備前守直数」とある。鑑方は豊後(大野町)城主戸次鎮連と同時代の人と推定される(「戸次氏系図」)。おそらく、島津軍進攻にあたって、大友義統は朝日ヶ嶽城に柴田紹安を(既述)、松尾城に戸次鑑方を派遣したのではなからうか。

第三に島津軍の馬匹・食料・武器などの確保、換言すれば兵站面からの理由について述べる。

史料に「大野郡三重ノ城主麻生常陸介入道道紹ヲシテ、兼テ薩州ヨリ馬商人ニ仕立タル間諜ノ者ヲ以、出勢ヲ促ス」とあ

て、麻生道紹を三重(紹和)(松尾)城主とする。しかし、島津方史料には「三重市人」「三重ノ町人」(「中務大輔家久譜中」等)と記し、城主とはみていない。おそらく、松尾城が対島津戦にあたって、臨時に設置された山城であったからであろう。確實な史料に基づけば、麻生紹和は大友家臣団のひとりと解せられるから(後述)、三重郷領主層であったのには間違いない。「満<sub>ニ</sub>金銀珠玉於倉廩<sub>ニ</sub>積<sub>ニ</sub>米錢財器於宅中<sub>ニ</sub>」という経済力と「嘗聞國郡貴賤士卒大半応<sub>ニ</sub>渠之言<sub>ニ</sub>」(「中務大輔家久譜中」)という政治力をもっていたらしい。これは大友氏の家臣としての地位および三重市を支配する立場にあったことに由来すると考える。

麻生氏が三重市の支配層であったことは「三浦かつさ等連署売渡状」<sup>(9)</sup>に  
麻生惣兵衛(た)あさうそうひやうへ殿へ、永(た)い五くわんもんうり申候事ちやうなり(下略)  
とある仍市天神かりや・かつさもち(つ)あさうそうひやうへ殿へ、永(た)い五くわんもんうり申候事ちやうなり(下略)  
と記され、永禄十二年(一五六九)、三浦上総が麻生惣兵衛に市天神(三重市守護神)仮屋を売り渡したことによって証することができ、麻生紹和が麻生惣兵衛と類縁の関係にあることは直ちに証明できないにしても、紹和の経済力が、永禄年中の麻生一族の市天神支配を背景にしていることは、うなずけないことではない。

島津家久は豊後国進攻に先立って、家臣の長田播磨・田中筑前を派遣し、麻生紹和に積極的な盟約工作を行なわせた。この工作は、松尾城攻略にあたって「紹和(紹和)把卒一族・子孫・家臣已下、箆食壺漿以迎<sub>ニ</sub>我帥<sub>ニ</sub>、故不<sub>レ</sub>勞而入<sub>ニ</sub>手裡<sub>ニ</sub>也」(「中務大輔家久譜中」)という結果をもたらした。家久の松尾城進攻の理由には、城下に三重市という兵站都邑が存在し、その支配権を握る領主層を招撫し得たことがあげられるであろう。

註

- (1) 「豊後国古城蹟并海陸路程」「大分県郷土史料集成地誌篇」五二頁
- (2) 「三重町誌沿革篇」三〇頁
- (3) 「大分県史古代篇I」二四七頁

- (4) 大分県立大分図書館蔵「豊後国大野郡村誌」(豊谷村の項)
- (5) 臼杵市立臼杵図書館蔵「御会所日記」
- (6) (5)に同じ。松尾村の項
- (7) 首藤恭二蔵「大友・戸次・大神三家系図附大友氏下向之時供奉之諸氏名簿」、写本は大野町上津八幡社蔵
- (8) 「雉城雜誌二」「大分県郷土史料集成地誌篇」五四三頁
- (9) 「大野有田文書」「大分県史料(3)」九〇頁

#### 四 松尾城における島津軍の戦略的動静

島津軍の第一次松尾城在陣は、天正十四年十月二十日ごろから十一月八日ごろまでは続いたと考える。すなわち、十一月八日付の文書に<sup>(1)</sup>

薩摩悪党國中へ令乱入(中略)雖然千石秀久、長曾我部元親・同信親申談候之条、不可有氣仕候、殊至三重郷、敵指籠候(下略)

とあり、島津軍が三重郷松尾城に滞陣していることを知り得る。十一月十五日には家久が大分郡大塔梨尾山(大分市大字上戸次)に軍を進め、利光宗魚の守備する鶴ヶ城の偵察を行なったと伝えられているから(「大友家文書録」)、十一月中旬ごろには松尾城から府内に向かって進撃したのであろう。

松尾城は東の佐伯荘榑牟礼城、西の緒方荘諸壘に対する戦略的な位置にあった。松尾城に着陣した家久は、十月二十三日、使僧玄西堂を派遣して榑牟礼城佐伯惟定に和睦を勧めたが、惟定はこれを聞かず、玄西堂をはじめ十九人の士卒を番匠測で斬殺した(「大友家文書録」「義弘公御譜中」)。このため、十一月三日、家久は土持親信以下二千人に榑牟礼城攻撃を命じ、四口以降、堅田口・野津口・切畑口・因尾口・岸河内口で戦闘が行なわれている。島津軍は佐伯惟定の頑強な抵抗に会って敗

退した（「大友家文書録」）。十一月六日の文書に「（佐伯）惟定、被<sub>レ</sub>遂<sub>ニ</sub>防戦<sub>ニ</sub>悪党数多被<sub>レ</sub>討果<sub>ニ</sub>候<sub>（下略）</sub>」とあるから、佐伯方面の戦鬪が十一月四日ごろ行なわれたという「大友家文書録」の日は確かであろう。また、対佐伯戦の島津軍兵が「三重松尾城の薩州勢」であったと述べている「大友興廢記」の記事も信憑性をもつと考えられる。

家久は毋率礼城作戦を行なう一方で、対緒方作戦を取行した。この作戦は次のように行なわれたことが「義久公御譜中」に記されている。

而後（松尾城着陣後）近郷諸畧村舎悉放火去、而後伊集院下野守（久治）・同姓美作守・木田下野守（親貞）・上井伊勢守（寛兼）領<sub>ニ</sub>軍衆<sub>ニ</sub>振<sub>ニ</sub>武威<sub>ニ</sub>、而陥<sub>ニ</sub>結方城<sub>（別本に緒方城）</sub>（下略）

この緒方城は柏野畷（緒方町大字軸丸）・高尾畷（同上）・小牧畷（緒方町大字野尻）三畷の総称であろう。「大友家文書録」に「緒方荘有三十六人地土佐伯惟定之属、耳忍郷地土党之築<sub>ニ</sub>畷<sub>ニ</sub>於相野・小牧・高知尾、（三所共在）緒方荘領」とある。このうち高知尾は高尾の誤りと考える。耳忍郷は緒方荘内（清川村の北部）の郷のひとつであるから、三十六人の地土は佐伯惟定所屬とは考え難く「大友興廢記」にいう「前は戸次紀伊入道道雪の与力、今は志賀太郎親次の与力」とするのが妥当であろう。これらの諸畷は島津軍の猛攻を支えきれずに降伏。家久は甲斐重尚を戌将とし、二八〇人以上の士卒を置いて小牧城を守備させた（「後編旧記雜録」天正十五年正月条）。島津軍の緒方三畷攻撃の日時についての確実な史料は見当たらない。「大友興廢記」「西治録」「豊薩軍記」などの戦記類は、高尾畷の攻撃を十月二十七日としている。既述のように島津方の史料は、これらの戦鬪を家久松尾城着陣早々のことと記しているから、ほぼ誤りはないであろう。

島津家久は十一月中旬（十一月十五日ごろ）に松尾城を出て大分郡梨尾山に布陣する。前方の鶴ヶ城に対する攻撃準備と、側方の大友宗麟の拠る丹生嶋城への制圧を図る目的であろう。「大友家文書録」によれば、十二月七日、鶴ヶ城包圍。十日には守将利光宗魚戦死。十一日、鶴ヶ城救援のため大友義統・千石秀久・長曾我部元親・信親父子らが府内を發して翌十二・十三日に島津軍と対戦、惨敗を喫した。「義久公御譜中」にも「即日家久入<sub>ニ</sub>府内<sub>ニ</sub>」として、十二月十三日の合戦と府内占拠を

伝えている。このとき、島津義弘は直入郡津箇牟礼城（竹田市大字入田）に在陣していたが、家久の府内占拠を聞いて「三重軍（松尾城在陣の島津軍）衆得<sub>ニ</sub>勝利、聞<sub>テ</sub>入<sub>ニ</sub>府内<sub>ニ</sub>之幸事、則我之諸將半曰、速<sub>ニ</sub>于府内<sub>ニ</sub>（下略）」と述べている。次に島津軍の第二次松尾城在陣について述べる。

天正十五年正月一日、豊臣秀吉は島津氏討伐を決定し、諸將の部署を定めるなどの準備を始めた。同月十九日、島津義久は羽柴秀長・石田三成に対して、島津軍の豊後国進攻によって千石・長曾我部軍を数千騎打ち果たしたことは是非もないことであつたこと、決して京都・大坂に逆心を構えたのではないことを弁明している（「義久公御譜中案文」）。豊臣秀吉の島津討伐を慮つてのことであろう。豊後国府内に滞陣した島津家久軍中にも、秀吉出陣が予想されたのであろう。止むを得ず帰国するようになり、そのとき、三重通路を絶たれたならば、我が軍の進退はどうなるかという危惧があつた（「樺山兵部大輔忠助譜中」）。

天正十四年十二月二日、岡城に拠る志賀親次は、軍兵一、五〇〇名を派遣して柏野畷に拠る島津軍を攻撃。翌三日、同畷を陥落させ、越えて翌年二月十五日、小牧畷に襲来した志賀軍は、十八日、島津方の守将甲斐重尚と戦い、これを陥落させた。この戦闘によって、甲斐重尚以下多数の島津軍将士が討死した（「右馬頭征久譜中」および「後編旧記雑録」天正十五年二月十八日条）。これまで島津方に降伏していた緒方・耳忍地士は志賀軍に復帰している（「大友家文書録」）。

柏野・小牧畷の敗戦は、松尾城在陣の島津軍に脅威を与えたい。三重（松尾城）警固のため、正月十八日に府内を發して、翌十九日、松尾城に帰陣していた樺山忠助は、しばしば、府内の島津家久に三重方面の危機を告げて救援を求めたので、急拠、兵を返して松尾城に再入城。日向国塩見・日知屋・門河の士卒を松尾城に置いて警衛させるとともに、四面五・六里の間の大友軍を追退して、三重方面の一応の安寧を保った（「中務大輔家久譜中」）。家久の松尾城再入城は二月二十日過ぎごろと思われる。

家久の第二次松尾城滞陣について「其後家久公渡<sub>ニ</sub>御于松尾城<sub>ニ</sub>也」（「樺山兵部大輔忠助譜中」）とあり、家久が松尾城に

止ったとも、また「義珍（義弘）・家久率二大軍、經三重路ニ議到ニ日向ニ」（「義弘公御譜中」）とあって、義弘・家久が府内で軍議を行なったという記載があるから二月二十日ごろ、三重口の騒乱をおさめた後、府内に帰陣したとも受け取られる。ところが「樺山紹劔自記」に

（家久）中務被<sub>レ</sub>仰候ける、今分ニ候へハ遠慮不<sub>レ</sub>入事と存候、縫殿助殿・狩野介江申候、乍<sub>ニ</sub>推參ニ我かの上城へ移可<sub>レ</sub>申与申候得者、我々も左様ニ存候とて、家作候而體而罷上候

とある。この時期は正月十九日以降のことであり、家久の松尾再入城および同城の修復を知り得る。また、三月十五日夜半、府内を退去する島津義弘を「中書公・又七殿為<sub>レ</sub>迎進発也、愚息規久（樺山紹劔子息）最前企<sub>ニ</sub>參迎<sub>ニ</sub>者也」（「樺山兵部大輔忠助譜中」）として、家久が松尾城から迎えに行っているから、三月十四日以前には、島津家久は松尾城に駐留していたと考えてもよい。

府内を退去して松尾城に向かう島津義弘軍は、清田郷（大分市判田地区）で清田衆の猛烈な抵抗に出会い、伊集院美作守らの重臣を失う。翌十六日の早朝、松尾城に入城、島津家久と再会した。十六日は夜を徹して軍議が行なわれた。このときの座中の人衆は

義弘公三重之城ニて御評定人数、

中務大輔家久 川上上野守「忠克入道意鈞」

伊集院右衛門大夫「忠棟」吉田美作守

鎌田出雲守「政近」

（「後編旧記雜録」天正十五年三月条）とある。軍議は明十七日開陣、帰国と決定した。議定のとおり、三月十七日早朝、島津軍は松尾城を退去する。

(1) 「問注所文書」『増補訂正編年大友史料二七』三〇六号

(2) 「前掲書」三〇三号

## 五 島津軍の松尾城退去

天正十五年正月十七日、島津義弘・家久の松尾城退去の前後、大友家臣団・地下衆はどのような対応を示したであろうか。

正月十九日に樺山忠助が松尾城警固として府内から帰陣したとき、次のような偵察を行なっている（「樺山紹劔自記」）。

（松尾城）  
城之後又向之原ニハ、高屋衆とて地下衆七百人の衆と申候而罷居候、（中略）城近きハ壹里、遠きハ貳上り、人数二百三百、六七百、千貳千三千宛にて拵たる在郷衆初皆撫付て、礼儀迄ニテ有ける人衆拾三ヶ所敵と成候、（中略）松尾籠之人衆計未其色不見得候、日夜用心仕候而人質を取、手ニ付候、

松尾城のうしろや向いの原には、高屋衆という地下衆七〇〇人が居住している。島津軍進攻にあたって、この高屋衆はもとより大野郡内諸郷の地下衆が降伏したが、正月十九日の段階では十三か所の地下衆が反島津勢力に変わっている。しかし、松尾城籠の地下衆は反旗をひるがえすようには見えない。人質をとって手に付けているからであろう。この偵察に基づけば、松尾城下には南の高屋、東の広瀬、北の迎広瀬等、西の本松尾<sup>(1)</sup>に七百人の住む集落があり、これら地下衆が一括して高屋衆と呼称されている。

地下衆とは一般に土着の人や百姓の意であるが、大友氏は領民の身分を被官・地下・百姓と区別している<sup>(2)</sup>。被官は主家から領地を安堵された武士層、百姓は土地耕作に従事する農民層である。戦国時代末期、大友氏治政下における地下の身分は、日常、農業などの仕事に携わり、非常の場合には軍事組織に編入される階層、つまり臨時戦闘員と考えられる。樺山忠助は七〇〇人の高屋衆のうち、相当数が軍事力を行使する可能性を保持していると観測したのであろう。それゆえに島津軍は高屋衆に

対して「日夜用心仕候而人質を取」る措置を講じたと思われる。三月十七日未明、すなわち、島津軍の松尾城退去直前に「いかなる者の告渡候けるや、夜中に人衆引取候而、夜明候而見候へハ城之衆計也」(「樺山紹劔自記」)という情況を呈したことは、高屋衆中などの地下衆にも松尾城内島津軍中に働いた者がいたことを知り得る。島津軍退去にあたって、これらの地下衆が消極的な抵抗を示したことは後に述べる。

島津軍進攻の際、島津氏の招撫に応じた麻生紹和は、どのような処分を受けたであろうか。「大友家文書録」に、

(大野郡三重之土)

麻生紹和事、今度、相<sub>レ</sub>構逆心<sub>一</sub>付而、跡職令<sub>レ</sub>闕所<sub>一</sub>候、然者、其方へ紹和預置候(中略)自然、其<sub>レ</sub>向後<sub>一</sub>紹和一類申儀在<sub>レ</sub>

之者、急度、国本へ可<sub>レ</sub>申越<sub>一</sub>候、弥曲事之段、可<sub>レ</sub>申付<sub>一</sub>候(下略)

(天正十五年)

卯月廿七日

義 統 在 判

富来惣兵衛入道殿

とあり、領地は没収、身柄は富来惣兵衛に預ける。もし、麻生紹和の分類と申す者があれば注申せよというのである。その後、麻生紹和の処断は伝わっていない。

三重郷のうちにも、島津軍に対する抵抗勢力が存在したらしい。島津(北郷)忠虎に関する史料に次の記事がある。<sup>(4)</sup>

都城来住口下長飯

三重町

天正十四年 太守義久公、薩・隅・日三州を鎮、筑後・筑前・豊後・豊前・肥後・肥前六ヶ国江御出張、讃岐守忠虎公も豊

後江御発向被<sub>レ</sub>合戦、同国三重之郷民七百余人被<sub>レ</sub>召捕、御帰陣之節、被<sub>レ</sub>召列<sub>一</sub>候者共、都城本之原江町相立被<sub>レ</sub>召置、其節、

本町・三重町・後町元服の坂より上水落村之上まで三町御立被<sub>レ</sub>召置<sub>一</sub>候

北郷忠虎は島津義弘軍中において、肥後口から豊後国へ進攻した武將である。代々、日向国荘内北郷の地を支配し、南北朝時代、都城(鶴丸城)を築城して、ここを本拠とした島津氏の支族であった。豊後国退去にあたって、肥後口軍勢に北郷忠虎の

名が見えないことから、島津義弘・家久に従い松尾城を経て日向口へ退去したことに違いない。このとき、三重郷民七〇〇余人を捕虜として帰陣、城下の本の原に三町を立て、ここに三重郷民を居住させたと伝えているのである。町名を三重町と名付けたのは召連れた人々の生国名に因んだのであろう。

次に北郷忠虎の召連れた三重郷民について触れる。

鶴丸城（都城）下の三重町部当（町役人）に二之宮孫左衛門が任じられている。その系譜を抄出する。<sup>(5)</sup>

一二之宮孫左衛門

豊後御帰陣之節被<sub>レ</sub>召列<sub>レ</sub>、大部当被<sub>レ</sub>仰付<sub>レ</sub>候

一同九郎左衛門、右孫左衛門嫡子、初助太郎与申候、元和五年膳尾口高七石、孫左衛門引統部当役相勤

とあって、二之宮氏は代々部当役を勤仕している。寛永年中の町役人については、

一 当时町役部当老人

一 横目式人

一 用聞七人

一 一定<sub>□</sub>行司式人

一 町同心老人<sub>半方</sub>切

一 中橋見廻老人

一 観音前東口橋見舞老人<sub>(マ、)</sub>

一 新道橋見舞老人<sub>(マ、)</sub>

とあり、部当は町役人の最上層を占める。また、同書に野口肥前守宗喜について、

(天正)  
(北郷)

同十四年忠虎公豊後御帰陣之節、同国三重方被<sub>レ</sub>召列<sub>レ</sub>、三重町ニ被<sub>レ</sub>召置<sub>レ</sub>候、然ルニ代々酒屋職仕候、寛永之比、寛陽院様

東目御下国之砌、野口善六直太方<sub>ノ</sub>御酒差上候処、甚美酒之由被<sub>レ</sub>遊<sub>レ</sub>御賞<sub>レ</sub>由、諸酒水出所迄被<sub>レ</sub>聞召上<sub>レ</sub>、城下稻荷宮之<sub>(マ、)</sub>

下、清水を以酒作入之由被<sub>レ</sub>聞召<sub>レ</sub>、酒屋号稻荷山与為<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下由申伝候、如<sub>レ</sub>此由緒之訳を以、太守公御通之砌者、稻荷山酒差

上事之由、

但、野口宗喜一族繁多有<sup>レ</sup>之、都城野口長次・野口大助・鹿府士野口真如院并弟野口万之進、其外、本町野口休右衛門・同仙助、其外、町家江罷居候、野口名字之者、此一族多候事、宗喜弟宗兵衛子孫之儀、三重町へ多有<sup>レ</sup>之候と記し、三重郷民のうち、野口氏の繁栄を伝えている。

このほか、島津軍帰国にあたって、鎌田政永・政棟兄弟の連行した豊後国人についての記録<sup>(6)</sup>がある。

安藤内記と云る人男女十六人山江籠居たるを生捕、令<sup>ニ</sup>帰国、アツハレ一番之手柄也となり、正月二日、我宿へ列下ル、サアレトモ其後<sup>ニ</sup>從<sup>ニ</sup>天下御意<sup>ニ</sup>、本國豊後江被<sup>ニ</sup>召返<sup>ニ</sup>、内記之次男安藤又八郎ハ残<sup>レ</sup>居而、程を経て帰国早、為<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>取者ハ皆被<sup>ニ</sup>召返<sup>ニ</sup>候、掃部兵衛・豊前兵衛手柄之事茂、以来寛<sup>ニ</sup>成事もナシ、徒事<sup>ニ</sup>成<sup>ニ</sup>けり、

文中の「天下御意」は豊臣秀吉の命令であろうか。<sup>(7)</sup>島津領国内に連行した安藤内記をはじめ一六人が、豊後国へ帰国させられている。北郷忠虎膝下の三重町住人には「天下御意」が及んだ様子は見えない。野口肥前守宗喜はその系譜に<sup>(8)</sup>

天正八年麻生上総介没落之時十六騎麻生召列之内なり、

とあり、いま、この事実は未詳であるが、野口宗喜や部当<sup>ニ</sup>之官孫左衛門をはじめとする三重町住人が島津氏に何らかの抵抗を示して「召捕」えられた武家被官層であり、安藤内記らが百姓身分であったために「天下御意」の適用の相違が生じたのではなからうか。

北郷忠虎の三重郷捕虜数は七〇〇余人という。文政年間の鶴丸城下三重町住人の数は、男一〇九名、女九六名、後町住人の数は約三五名とされているから、七〇〇余人という捕虜数には誇張があると思われる。移住を逐げた旧三重郷民は、

御城内為<sup>ニ</sup>諸用、天長寺之上<sup>ニ</sup>市場<sup>究</sup>り、月々九度之市被<sup>ニ</sup>召立<sup>ニ</sup>候、本町ハ七々之日、三重町ハ十々之日、後町ハ四々之日、

一町三日之市日ニ而、于今、八幡城ニ市場与唱候所有<sup>レ</sup>之、此所江三町方式日ニ罷出、御城内士諸用相調候、

とされて、商業に従事したと伝えられている。既述の野口氏の例は日向国定住後、商業活動を行なった痕跡を示すものである。

島津義弘・家久軍の松尾城退去から日向国県城までの経緯について触れる。「樺山兵部大輔忠助譜中」に次の記事がある。  
 義弘主待日出發於松尾城、其後中書公之父子出城門也、從其後忠助・規久為開陣、爰地下之貴賤群衆、而為見物、其中有惡口之族、一兩輩討殺之、而後令進發矣、

ここに島津軍の松尾城退去に対する三重郷民の積極的な抵抗を見ることができない。三重土豪麻生紹和の島津氏恭順の影響であろうか。島津軍本陣の広福寺について、慶長十六年（一六一一）三月制作にかかる「松尾山広福密寺木版略縁起」（三重町吉祥寺蔵）に、

当山漸く隆んなりしに、嗚呼天なる哉、天正ノ頃、豊薩兵皇の劍、薩州勢当山ニ陣取要害と為す、堂裡山門十一ヶの房舎に悉放火し、堂地坊跡等空而已、

とあるから、島津軍の放火によって焼じたとみてよいであろう。島津軍士長谷場越前はその自記の中で「彼中道の村を放火して」と述べている。あながち、虚言ではあるまい。道中の丈六寺についても「在三重郷肝煎村、不詳其始、天正中罹薩之兵燹」（『豊後国志』）と記されている。「松尾城から」一里行過て、千葉師とて寄妙至極をわします、諸病疾除の誓願ニ而、往來人之三礼す」（『長谷場越前自記』）。「心静ニ松尾城を罷下り候（中略）心静ニ千葉師堂江見物いたし候」（『樺山紹劔自記』）と、島津軍は三重郷連城寺所屬の高一寺に参詣している。兵火に会わなかったのは由緒の故であろうか。三重から宇目まで四里。この間に三重郷における大友勢最後の反撃が行なわれる。

坂より上を奥畑と云所之人衆、未明より可切取覚悟ニ而、手火矢軍ニなりけるを跡ニ者不知、各鉄砲衆を指合せ射のけてハ通る程にわつらひなし、

（『樺山紹劔自記』）とあるように鉄砲戦が展開される。「樺山」規久則弓手の方へ馬をおり直し、道上を矢たけ計り懸歸し時、初より取切候奥畑之方敵に取合、太刀下ニ敵を打、首差上」（『樺山紹劔自記』）ける白兵戦も行なわれた。「三浦出雲守・三浦伊賀守・渡辺大学助・小間弾正忠謂之宇目四傑、豊薩之役皆戦死」（『豊後国志』）とあるのは、島津方という奥畑

戦のときであろう。奥畑衆の抵抗は三城・佐土原・穆佐の銳兵によって「斬獲數百、殘党悉以追退」(「中務大輔家久譜中」)するといふ結果に終わった。

この後の島津軍の行動は「今夜宿于長谷川内」也、同月十八日、発于長谷川内「凶徒等進來」(「義弘公御譜中」)とある。

「豊薩軍記」などの戦記に記すように佐伯惟定の軍勢が襲いかかったのであろう。家久の指揮によって、この逆襲軍兵は追退されたが、島津軍は阿多筑後守・大寺安辰・大寺仁兵衛を失った。長谷川内の所在は未詳であるが「後編旧記雜録」天正十五年三月十八日の条に「大寺仁兵衛、梓越にて疵を蒙り、田野に回て死す、」とあり、現在、宇目町大字田野長谷を長谷川内に比定したい。梓山を越えるころ、薩・隅・日三州在国軍が到来、十八日夜泉城に入城。ここに島津軍の豊後国進攻作戦は幕を閉じたのである。

註

- (1) 渡辺澄夫蔵「慶長貳年太田飛驒守帳写 豊後国大野郡三重郷御檢地帳松尾村」。渡辺博士からとくに披見を許された。ここに厚く謝意を表す。
- (2) 「大友義統書状」「大分県史料33」一七〇一号
- (3) 『増補訂正編年大友史料二七』五三三三号
- (4) 宮崎県都市立都城図書館蔵「庄内地理誌卷二十七」以下所蔵者名略、同書については見玉三郎氏の御教示によった。
- (5) 「庄内地理志」卷二十七
- (6) 「前掲書」卷七十四
- (7) 『史料綜覧卷十二』天正十六年八月二日条参照
- (8) 「庄内地理志」卷二十七